## 受象に帯形して対いう、とこれでは、このでしていしていり、見

最後に滞在した村から、北に五十キロ 最後に滞在した村から、北に五十キロ は、〈世界の終わりの村〉だった。荒のは、〈世界の終わりの村〉だった。荒のは、〈世界の終わりの村〉だった。荒の間の灰色しかなかった。門番が住ん でいたのであろう石造りの建物は、壁がでいたのであろう石造りの建物は、壁がでいたのであろう石造りの建物は、壁がでいたが進んでいるのか、半ば砂となっている壁もあった。 村を囲っている柵はとんどその原型をとどめていない。柵はとんどその原型をとどめていない。柵はとんどその原型をとどめていない。柵はしている。私はそれを越え、〈世界の終わりの村〉に入村する。

造りの家だけではなく、木造の簡素な家路上に生える僅かな雑草は枯れ果て、力路上に生える僅かな雑草は枯れ果て、力持の中の建物は入村する前に見た、石

というの昔に日が落ちているはずなの た、夜にしては明るすぎ、日が出ていたり たっていた。それらの姿はまさに廃墟と たっていた。それらの姿はまさに廃墟と でぶにふさわしく、人の住める場所であ であと、そこには厚い灰色の雲がかかった。をうの昔に日が落ちているはずなの る。とうの昔に日が落ちているはずなの る。とうの昔に日が落ちているはずなの る。とうの昔に日が落ちているはずなの る。とうの昔に日が落ちているはずなの る。とうの昔に日が落ちているはずなの る。とうの昔に日が落ちているはずなの たしては暗すぎた。まるで夜と昼の境界

私はひとつの廃墟に入る。そこは何か を飼育していたであろう施設であった。 を飼育していたであろう施設であった。 ちば、それは養豚場によく似ている。小 ちば、それは養豚場によく似ている。小 さな飼育場がいくつも並んでいた。だが、 さな飼育場がいくつも並んでいた。だが、 さな何が飼われていたのか、あるいは で、埃が厚い層を作っていたからだ。すでに何も飼わなくなっていたからだ。すでに何も飼わなくなっていたからだ。

> を構に手をかけた。すると、瞬く間にそれは柵という形を保てなくなり、砂となる。私は目の前で起きたことがすぐにはわからなかった。誰かの仕掛けた悪戯という言葉が浮かんだが、誰が何のために仕掛けたのか、私にはわからなかった。 世掛けたのか、私にはわからなかった。 はかと化した柵を見ると、外に溢れている がと化した柵を見ると、外に溢れている がとれば柵という形を保てなくなり、砂とな

私はそれらを見ながら、噂に聞く〈世界の終わりの村〉の姿そっくりだと思った。旅人にとってこの〈世界の終わりのた。旅人にとってこの〈世界の終わりのたは存在せず、ここに留まるか、あるの先は存在せず、ここに留まるか、あるいは来た道を戻るかのどちらかを選択せいる得ない。そうやって、留まることをざる得ない。そうやって、留まることをがはかく世界の終わける。

こと、住んだとしても他の村とほとんどして住みやすいとは言えない土地であるに来る旅人は少なくなってしまった。決にかし、いつしか〈世界の終わりの村〉



交流をすることができないこと。それらのせいで、〈世界の終わりの村〉に住んのせいで、〈世界の終わりの村〉に住んでいた人々はひとり、またひとりと失われていった。今では〈世界の終わり〉を見てみたいと思う変わった旅人だけがここを訪れる。そして、私もその旅人の一人だった。私はそんな人が住むべきでないところに住むものの話を聞いてみたいところに住むものの話を聞いてみたかった。

養豚場に似た施設から出て、私は再びても、生きているものの気配はなかった。ても、生きているものの気配はなかった。、すべての色が失われ、すべての匂いが消すべての色が失われ、すべての匂いが消すべての色が失われ、すべての匂いが消すべての色が失われ、すべての匂いが消すべての色が失われ、すべての匂いが消すとと、まなできるだろうか。私は灰色のコートのとをたて、身体を縮める。寒さが徐々に、身体の芯を侵していった。息を吐くと、身体の芯を侵していった。息を吐くと、身体の芯を侵していった。息を吐くと、身体の芯を侵していった。

本と、どこからともなく風に流され、ふと、どこからともなく風に流され、 少女の小悪魔のような笑い声が聞こえて くる。それが廃墟のなかで反響し、静 家の村を包む。私は思わず、顔をあげ た。あたりを見渡し、声の主を探す。だ た。あたりを見渡し、声の主を探す。だ が、その姿はおろか気配すら感じられな が、その姿い声は再び廃墟に響いた。私は声 その笑い声は再び廃墟に響いた。私は声

誰かいるのか。

その声は木霊となって、廃墟の中に響き渡る。その瞬間、少女の笑い声は消えた。ゆっくりと消えていく自分の声を聞た。ゆっくりと消えていく自分の声を聞きながら、私は周囲を見渡した。だが、然が周囲を見渡し終わった後、またあの少女の声が消えてきた。

こっちにおいで。

また、くすくすという笑い声が聞こえて落ちてきたのだ。私はすぐさま走り出す。店振り向く。廃墟の小さな瓦礫が地面にに振り向く。廃墟の小さな瓦礫が地面に

り抜ける。

○世界の終わりの村〉に住んでいるもの は半壊、あるいは全壊しているた 建物は半壊、あるいは全壊しているた 建物は半壊、あるいは全壊しているた はんでいるとはとうてい思えない。だん た。埃のたまり具合から、長年ここが使 た。埃のたまり具合から、長年ここが使 た。埃のたまり具合から、長年ここが使 た。埃のたまり具合から、長年ここが使 た。埃のたまり具合から、長年ここが使 た。ないるとはとうてい思えない。だか らこそ、この〈世界の終わりの村〉に人が 住んでいるということに、私は大変な 順味を覚えた。一目でよいから、どのよ うな生活をしているか見てみたい。どのような話をしているか見てみたい。 ような話をしてくれるのか、聞いてみた ような話をしてくれるのか、この ような話をしてくれるのか、この たのかを知りたい。私はそのために、走っ たのかを知りたい。私はそのために、走っ

女の声が廃墟に響き渡る。
が背中に小石を投げられた。そして、少を縫うように彷徨う。立ち止まれば、必を縫っように彷徨う。立ち止まれば、必

こっちよ。

私はすぐさま振り向いて、走り出す。だが、一向に人の姿どころか気配すら感じられない。私は声の主に遊ばれているのだろうか。何度か同じ道を繰り返し、走り回った。あるいは、この〈世界し、走り回った。あるいは、この〈世界の終わりの村〉には人なんて住んでおらの終わりの村〉には人なんて住んでおらい、私の背中に小石を投げ続けているのは、ここで死んでいった旅人たちの亡霊であるかもしれない。

はいない。 はいない。 本が立ち止まると、まるで止まっては がはないと言わんばかりに背中に小石を がはないと言わんばかりに背中に小石を がはないと言わんばかりに背中に小石を がはないと言わんばかりに背中に小石を

終わりの村〉では色も、匂いも、音もなをして、酸素をめぐらせる。廃墟には私をして、酸素をめぐらせる。廃墟には私をして、酸素をめぐらせる。廃墟には私の呼吸する音しかしない。私は〈世界の終わりの村〉で、いかに場違いな存在で終わりの村〉では色も、匂いも、音もない。

ることはできない。れば、この〈世界の終わりの村〉に留まれば、この〈世界の終わりの村〉に留ま

だが、声の主は、また私の背中に小石を投げつける。なかば私を期待させるかのように。まるで後ろを振り向けば、まで見ぬ声の主が立っていることを予感させるように。そして、まだまだこれからと言っているかのように。私はゆっくりと振り向く。また、終わりのない、いたと近り向く。また、終わりのない、いたちごっこが続くかと思われた。

とり、立っていた。とり、立っていた。

しら。旅人さん。 こんにちは。それとも、こんばんはか

を着た少女は、その透明な声で言った。 整きで言葉を上手く紡ぐことのできない 驚きで言葉を上手く紡ぐことのできない ない。 ないがらかってしまってごめんなさい。あ

らあたし、嬉しかったの。

君の名前は?

やっとのことで出てきた言葉がそれ だった。彼女は壁から手を放し、こちら だった。彼女は壁から手を放し、こちら だった。彼女は壁から手を放し、こちら には何もいない、これが私の幻視である には何もいない、これが私の幻視である には何もいない、これが私の幻視である とするならば、もっと納得が出来たであ るし、それでいて、まるで無のように気 配がなかった。色も、匂いも、音も失っ た村の住民は、気配すら奪われてしまっ たのだろうか。まるで人形のようだった。 博物館に静かにたたずむ少女の姿をした 人形。それが夜な夜な動き出していると したら、このように色も、匂いも、音も 気配すらもない歩き方が出来るのかもし

た。鈴を転がしたような声が廃墟へ静か彼女は歌うような抑揚のつけ方で言っあたし? あたしに名前はないわ。

に浸透するたびに、私は思わずそれに聞き入ってしまう。だから、私と彼女の会が、彼女はそれにも何ひとつ文句を言わが、彼女はそれにも何ひとつ文句を言わが、彼女はそれにも何ひとつ文句を言わが、な女はそれに聞けない。

妹と一緒にずっと暮らしているの。こに生まれてからすぐに死んでしまったこに生まれてからすぐに死んでしまった

、いないわ。物心ついたころから、、二人だけで? 他に人は? 出に人は? かいついたころから、ごりがいからずっと、あたしもあたの。それからずっと、あたしもあた

いないわ。物心ついたころから、あたしたちはひとりぼっちだったの。だから、あたしたちは名前を持っていない。それあたしたちはひとりぼっちだったの。だから、もれを必要としない。あたしとあなたしか存在しない中で、それ以上の呼び名は必要ではないでしょう?

私は君を何と呼べばいいのかな?確かにそうだ。だけど、それじゃあ、

少女らしく、可愛らしかった。くりくり彼女は首を傾げる。その仕草は年頃の

る。
を開くまで、その仕草をつぶさに観察すを開くまで、その仕草をつぶさに観察すとした目をぱちぱちとさせながら、少女

素敵だわ。君にしましょう。 君、でいいわ。そうね、君って響きは

界の終わりの村〉なのかな? それじゃあ、君に訊くよ。ここは〈世

そうよ。ここは〈世界の終わりの村〉だわ。この先には〈世界の終わり〉があるだけ。あなたも〈世界の終わり〉を見に来たのかしら? それとも彷徨っているうちにここにたどり着いてしまったのかしら?

で欲しい。君が生まれてから、この地に く世界の終わりの村〉があるというの たく世界の終わりの村〉があるというの たく世界の終わりの村〉があるというの は、聞いたことがある。そこにいつか は、聞いたことがある。そこにいつか は、聞いたことがある。そこにいつか どちらでもあるし、どちらでもない どちらでもない

たどり着いた旅人はどうしたんだい? さまざまよ。この地を折り返し地点とし、南の〈世界の終わり〉を目指して旅立った人もいるし、ここに住むことを決めた旅人もいるし、ここに住むことを決めた旅人もいるわ。旅人だけじゃないわある国の軍隊が来たこともあるし、ある国の国王が来たこともある。さまざまな選択があったわ。だから、さまざまな選択があったわ。あたしはそれをすたひとつだけこの地に残ったものたちのたむとつだけこの地に残ったものたちのたがは見てきたわ。

なくなったのかな? この地に残ったものはどうして皆、い

そのことを話すにはこの場所は向いていないわ。旅人さん、あたしの家に来ないかしら? こんなところで野宿すればいかしら? こんなところで野宿すればで見もある。ゆっくりと椅子に腰掛けてながら、この話の続きを聞くのはどうかながら、この話の続きを聞くのはどうかとら?

そうだね。それがよいかもしれない。

あたしの家に案内するわ。それじゃあ、決まりね。ついて来て。

被女はまるで跳ねるかのように歩く。 私は彼女の後を進む。彼女が地面を蹴る たびに、枯れ草はがさがさと音をたてる。 たびに、枯れ草はがさがさと音をたてる。 をれをものともしなかったが、私は途中 で何度かしんどい場面に出くわした。地 で何度かしんどい場面に出くわした。地 でがらも、必死に彼女の後を追う。少 りながらも、必死に彼女の後を追う。少 しでも気を抜くと、彼女を見失ってしま うからだ。彼女は時折、後ろを振り返り、 れている場合、彼女はその場に座り込ん でしまう。それが何度も続くので、私は 少しでも彼女をゆっくりと歩かせようと、 新しかけてみた。

手に歩いていた。逆に私がさらに必死に用なことに話しかけながらも、彼女は上

た。

6。 あたしたちはいつも仕事をしているの

返るような土の匂いもなく、胎動するか の一本、草の一本も生えていない。むせ きなひびが入っている。森はおろか、木 素敵な仕事よ。旅人さんにもいつか見せ 思わず見入ってしまうほどであった。彼 指を口元にあてる。その姿は可愛らしく、 痛んでいるようには見えない。 同じ石造りの家であるようだが、外壁は の頂上に一軒の家が建っている。廃墟と のような芯に響くゆれを感じる。その丘 に出る。だが、その大地は干からび、大 てあげるわ。きっと気に入ってくれるわ。 女は前も見ずに歩きながら、口を開いた。 がら、左手を後ろに回し、右手の人差し それは家についてから教えるわ。でも、 廃墟を抜けると、広く緩やかに続く丘 彼女が薄く微笑む。後ろ向きに歩きな 仕事? どんな仕事なんだい? 何よりも

がもくもくとあがっている。煙突からは鈍色の空に向かって、白い

あら、もう帰ってきたのかしら。 彼女の歩く速さが少しだけ速くなるだが、村の中よりも歩きやすくなったため、それほど彼女から離されることはなめ、それほど彼女から離されることはなり、それほどですがある。 でが、村の中よりも歩きやすくなったため、それほど彼女から離されることはない。

丘の頂上にある彼女の家からは〈世界の終わりの村〉が一望できた。私は円形 状に広がったそれを見ながら、それがま だ廃墟以前、人がたくさん住んでいたこ ろのことを想像した。たくさんの色があり、生き物の匂いがし、活気に溢れていたころの、この〈世界の終わりの村〉は 果たして、どのようなところであったの 果たして、どのようなところであったのだろうか。

を伝える。すると、奥から彼女とそっくて、旅人が久しぶりにこの村に来たこと彼女は木製の扉を開け、室内に向かっここよ、ここがあたしたちの家なの。

に、そっくりであった。服も、まるで映し鏡を見ているかのようりの少女が現れた。背格好も、着ている

になった。

んも少しからかわれたでしょう。は人をからかうのが好きなので、旅人さなことをされませんでしたか。彼女

動になったかもしれない。
村中を走り回されたよ。でも、いい運

く、飄々とした表情を浮かべている。 は、舌を出しながら、悪びれる様子もな は、舌を出しながら、悪びれる様子もな は、舌を出しながら、悪びれる様子もな ながら、悪びれる様子もな

君にも名前がないのかな?

私は目の前の少女に尋ねる。彼女は首 を横に傾げ、きょとんとした顔でこちら を用手にしているようだと私は思った。 を相手にしているようだと私は思った。 を相手にしているようだと私は思った。

いや、なんでもない。忘れてくれ。だ

当たり前じゃない。だって、あたしたちは双子なんだから。だから、本当はどちらが先に生まれてきたか、わからないの。あたしが姉で、彼女が妹とは言っているけれど、本当はあたしが妹で、彼女が姉かもしれない。だけど、どちらが姉ががかもしれない。だけど、どちらが姉ががかもしれない。だけど、どちらが姉ががかもしれない。だけど、どちらが姉ががかもしれない。だけど、どちらが姉かもしれない。だけど、どちらが妹かなんてことは、あたしたちにとって些細な問題でしかないのよ。

君たちはそれを疑問に思わないの?君たちはそれを疑問に思ったりはしないわ。あたしと彼女問に思ったりはしないわ。あたしに出来ることは、彼女にも出来て、彼女に出来ることは、彼女にも出来て、彼女にとないことは、あたしにも出来てい。

と?と?というは感覚である、というこを見ているような感覚である、ということになった自分の姿

彼女らの仕草をつぶさに観察する。だが、私の目の前にいた少女が頷いた。私は

いいほど一緒であった。の毛を触る仕草まで、まったくと言っての毛を触る仕草まで、まったくと言って手の動き、視線の動き、話し方から、細かな

呼べばいいのかな?

んだら、君たちはどちらが呼ばれたと思しも、私が二人のいるところで、君と呼しも、私が二人のいるところで、君と呼しも、私が二人のいるところで、君と呼いでいるとなった。

遠いに気づける自信があるのかしら? をして、あたしではなく彼女を、あなたがあたしもではながいないの。それに、ここにはひとりしかいないの。それに、ここにはひとりしかいないの。それに、ここにはひとりしかいないの。それに、あなたがあたしを呼ぼうと思って呼んだをして、あたしではなく彼女を、あなたはそののもとに行かせたとして、あなたはそののもとに行かせたとして、あなたはそののもとに行かせたとして、あなたはその

私は首を横に振った。私はきっとそ

彼女らは静かに微笑む。 そんな私の思考を見抜いたのだろうか、彼女を妹だと信じて、会話をするだろう。 の違いに気づけないだろう。私はきっと

そういうことなのよ。大丈夫。あたしに出来ることは、彼女にも出来るってに出来ることは、彼女にも出来るって言ったでしょう。だから、あなたがどちらを呼んだとしても困ることはないのよ。 さあ、行きましょう。こんなところにいても寒いだけでしょうし、あなたが聞きたい話はもっと別のことでしょう? 居間には暖炉もあるし、椅子もあるわ。 そこに腰掛けて、ゆっくりと話しましょう。

私は頷き、彼女らの後に続いて、廊下 を歩く。内装は小奇麗で、壁には古い絵 を歩く。内装は小奇麗で、壁には古い絵 で、世界の終わりの村〉の絵画があった。 た〈世界の終わりの村〉の絵画があった。 た〈世界の終が執拗なまでに描きこん でいる。他の絵が執拗なまでに描きこん

いる。

私は思わず立ち止まり、絵をじっくりを鑑賞した。色をまだ失っていない頃の草が生えていたことも、少しながら草が生えていたことも、少しながらながまったことも、この絵画からわかったがあったことも、この絵画からわかった。

絵を見るかぎり、サインのようなものはなかった。私は絵を裏返してみのはなかった。私は絵を裏返してみいる。するとキャンバスの後ろに消えかける。するとキャンバスの後ろに消えかけてはいるものの、日付と〈World's End Village〉というタイトル、そして、二人の少女たちへという言葉が書かれていた。その日付は六十年近くも前の日付でた。その日付は六十年近くも前の日付であった。

彼女らは壁から絵画を外して見ているその絵を見ているの?

はその後ろを黙って歩いた。 のまま、彼女らは無言で歩き始める。私た絵画は、彼女たちのもとに収まる。そはそれを制した。替わりに私の手にあった絵画は、彼女らは無言で歩き始める。私が、彼女

あの裏に書かれた言葉が誰を指しているのかは、わからない。彼女らの祖母かもしれないし、ほかもしれないし、まったく別の誰かかもしれない。ただあの絵だく別の誰かかもしれない。彼女らの祖母から。

庭下を抜け、居間に出る。それほど大きいわけではないが、家具が少ないので、 気にならなかった。壁には暖炉があり、 気にならなかった。壁には暖炉があり、 中では勢いよく火が燃えていた。壁には 数枚の絵画や、何枚かの写真がある。ど れもが〈世界の終わりの村〉を写したも ので、彼女らが写っている写真も、彼女

どうぞ、そこに腰掛けて。

暖炉の手前にあった安楽椅子を指して、

うのかな?

るような感覚だった。 居心地がよく、まるで何かに包まれてい 居心地がよく、まるで何かに包まれてい ともに、私は腰を下ろした。安楽椅子は

なった。 なった。 なった。 なった。 なった。 なった。 なった。 なった。

は、どんなことが聞きたいのかしら?さて。何から話そうかしら。旅人さん

君たちが見てきたこの〈世界の終わりの村〉の歴史がまずは聞きてみたい。どうして〈世界の終わり〉にこんな村が出来たのか、そして、どうして今では〈世界の終わりの村〉がああなってしまったのか、とても気になるんだ。君たちが聞いたことのある話でいいから、聞かせてくれないか?

はりどちらも同じで、もしかすると同じ視線を宙に浮かせていた。その仕草はや女らは遠い過去を思い出すかのように、彼女の抱いた絵画がこちらを向く。彼

かと思った。 過去を思い出しているのではないだろう

わかったわ。だけど、ひとつだけお願いがあるの。あたしたちが話している間いがあるの。あたしたちが話している間が浮かぶと思うわ。だけど、絶対にその話の腰をと思うわ。だけど、絶対にその話の腰をと思うわ。だけど、絶対にその話し腰を

終わりの村〉の歴史を語り出した。黙を挟み、彼女らはゆっくりと〈世界の黙を挟み、彼女らはゆっくりと〈世界の

まずは〈世界の終わりの村〉の話をするわる前に、それが出来る以前の話をするわる前に、それが出来る以前の話をするわたしたちが静かに二人で暮らしていたころ、〈世界の終わり〉に来る旅人はほんの僅かでしかなかったわ。それもほとんどが道に迷った末にたどり着いたものたちで、初めから〈世界の終わり〉を見るちで、初めから〈世界の終わりの村〉の話をする前に、それが出来る以前の話をする前に、それが出来る以前の話をする前に、それが出来る以前の話をする前に、それが出来る以前の話をする方に、それが出来る以前の話をする方に、

苦しみに包まれて死んでいく人もいた。 ちがいたわ。安らかな顔で死んでいった けていたもの。本当にたくさんの旅人た この世界に恨み言を残して死んでいった て息を引き取る瞬間に立ち会い続けたわ それを見届けたわ。ベッドのそばに座っ ようとしたもの、まだ見ぬ財宝を探し続 もの、広い世界をひとつでも多く見てみ 届けてきたわ。故郷に家族を残してきた したちは、たくさんの旅人さんの死を見 れてしまうかのどちらかだったの。あた でゆくか、ここを出て行っても途中で倒 ものや、薬なんてものはなかったの。だ 以外には何もなくて、彼らの望んだ食べ わ。〈世界の終わり〉には〈世界の終わり〉 れ、死んでいくものが少なくはなかった したちの家に来てからも、すぐ病に たの。彼らは皆、衰弱していたわ。あた いった人もいたわ。あたしたちはいつも 人もいるし、後悔を滲ませながら死んで から、ほとんどの旅人さんはここで死ん 人もいた。あたしたちは彼らが死に絶え

思ったの。 して、安らかに眠ってくださいといつもると、その骨をちゃんと埋葬したわ。そ

たわ。すべての人をあたしたちは迎え入 たわ。優しい人もいたし、乱暴な人もい たしたちはそんな彼らを何百人と見てき どり着いたわ。そして、帰っていく。あ 彼らはやすやすと〈世界の終わり〉にた かりだから、すぐに死んでしまったのね。 今まで迷子になったりして来た人たちば の装備をしてくる人たちが出てきたの。 うになったわ。だから、ここに来るため として、旅人さんなら誰でも知られるよ ない。いつの間にか、ここは旅の終着点 る。そこは世界の果てで、それ以上先が さらに北に行くと〈世界の終わり〉があ の終わり〉の噂が広まり始めたわ。北の たい。それからかしら、少しずつ〈世界 帰ることの出来た旅人さんたちもいたみ れたわ。あたしたちはふたりだけで完結 していたけれど、そんな生活はあまりに ほんの少しだけれども、生きて故郷に

> 増やして行こうと努力したわ。 宿ったわ。彼らはそれを喜び、それらを 少しだけれども〈世界の終わり〉に緑が ながら、それらを育てたの。そうやって けにはいかなかったから、彼らは交代し わ。それでも彼らはまず、草木を植える も人間が住めるような場所ではなかった 放っておけば、すぐにぼろぼろになって り〉で、草はすぐに枯れるし、家も少し は知っていたわ。ここは〈世界の終わ りながらも、とてもわくわくしていたの 誰かと関わっているときは、不完全であ 泣いてしまった瞬間、すべての瞬間で 話している瞬間、一緒に笑っている瞬間 ことから始めたの。一年間も滞在するわ しまう。夜は凍えるほど寒くなる。とて かと考え始めたの。だけど、あたしたち も退屈でつまらなかったわ。誰か他人と そのうち、彼らはここに村を作れない

終わりの村〉一帯から、あたしたちの住経ったころだったかしら。今の〈世界のそういった努力を始めてから十年が

ざっ。 終わり〉が緑で覆われたことを皆で喜んれでもこの空白の地であった、〈世界のれでもこの空白の地であった、〈世界のおでままで、すべてが緑に覆われたわ。結む丘まで、すべてが緑に覆われたわ。結

た部分が徐々に埋まっていくような気が 終わり〉は美しかったし、今まで空白だっ なれなくなったの。緑の宿った〈世界の たのを見て、彼らの行動を咎める気には らよ。だけど、〈世界の終わり〉に緑が宿っ 白の地であることを疑っていなかったか と白と黒と灰色の世界だと思ったし、空 だと思ったわ。〈世界の終わり〉とはずっ が緑を植えたとき、あたしたちは彼らの したちの〈世界の終わり〉まで、変えて ない楽しいことだったから。でも、あた 間たちの行動を好きにはなれなかったの 行動をこの〈世界の終わり〉を穢す行為 しまうとは思わなかったの。初めて彼ら 人間と話すのは好きだったわ。今までに あたしたちは本当はね、そういった人

をあたしたちは得たわ。今まで毎日は決 流することは楽しかったし、多くのもの ものをあたしたちに与えたわ。彼らと交 に留まることを許したし、彼らは多くの 見ていた絵もそのころ描かれたものよ。 ても満足していたわ。旅人さんがさっき の上に家をひとつ作ってもらったし、と るようになったわ。別に悪いことではな 可能にしたの。そしてそこで商いを始め は家畜を飼えるようになり、長期滞在を 瓦で出来た家がたくさん並んだわ。彼ら ものの数年で〈世界の終わり〉には赤煉 にあっという間よ。彼らは草を植えるこ それが〈世界の終わりの村〉よ。それは まった時間の仕事をこなすだけだったん とは当たり前の感覚よ。あたしたちは丘 んの人が訪れたし、そこで商売をするこ いわ。〈世界の終わり〉には毎年たくさ とが出来たことに自信を感じていたのね。 あっという間に作り上げられたわ。本当 あたしたちは彼らが〈世界の終わり〉 彼らは緑の次に村を作ろうとしたわ

で以来、あたしたちは毎日のように村にて以来、あたしたちは毎日のように村に行き、旅人と話すことが出来たわ。村人はあたしたちを受け入れてくれたわ。だはあたしたちを受け入れてくれたわ。だけがあってもいいんじゃないかと思っに村があってもいいんじゃないかと思ったらの話なんだけど、まあ、神様がいるとしたらの話なんだけど、その神様はきっしたらの話なんだけど、その神様はきっしたらの話なんだけど、その神様はきっしたらの話なんだけど、その神様はきっしたらの話なんだけど、その神様はきったのかり〉で人間が生きているなんてりの終わり〉で人間が生きているなんていうことを許せなかったのかしら。

初めはほんの些細なことだったわ。 雨だというのに外がたった一ヶ月間降らなかっただけ。彼がたった一ヶ月間降らなかっただけ。彼がたった一ヶ月間降らなかっただけ。彼がまった。大地がひび割れ、草がどんどん枯れた。大地がひび割れ、草がどんどん枯れた。大地がひび割れ、草がどんどん枯れた。大地がひび割れ、草がどんどん枯れた。大地がひび割れ、草がどんどん枯れた。大地がひび割れ、草がどんどん枯れた。大地がひび割れ、草がどんどん枯れた。 大地がひび割れ、草がどんどん枯れた。 大々は日を増すごとに雨を切望するようになったの。 そして、その。彼らは喜んで、雨だというのに外がたっ。 彼らは喜んで、雨だというのに外がたった。 しい

歳月をかけて作ってきた野原を取り戻そ そのせいで草は腐り、家はぼろぼろにな 祝ったわ。だけど、四日間、雨が続いた やむと彼らはまた家を建て、十年という 死んでしまった。でも、それだけじゃな たことがなかったから、たくさんの人が かしら。彼らはこんな異常気象を経験し わ。彼らが住み始めて、五十年頃だった 局、雨は半年にわたって降り続けたわ が降り続けばどうなるのだろう、と。結 を考えたのだろうと思うわ。このまま雨 り始めたわ。きっと彼らはよくないこと それが一週間続くと、彼らは少しずつ焦 が降っているのだと思うことができたわ とき、彼らはまだ今までの日照りのぶん 晩お祭り騒ぎよ。村が総出でこの雨を で踊り狂っていたわ。そこからは三日三 の村〉から人がいなくなったのは。雨が いの。これからなのよ。〈世界の終わり 村の半分は土砂に流されてしまった

だけど、不幸は続くわ。旅人さん、知っ

ているかしら? 何かを作るっていうの は本当に歳月をかけて行わなければなら ないことなのよ。だけど、その作ったも のを壊すのはほんの一瞬、ほんの小さな 出来事でいいの。まるでドミノよ。栄華 の歴史というのはドミノを作っているの を作れるか、それが栄華なのよ。そして、 を作れるか、それが栄華なのよ。そして、 を止めるにはものすごい力が必要なのよ。 を止めるにはものすごい力が必要なのよ。 でらにはその倒れるドミノを止める力は

村のある家で双子が生まれたわ。だけ 生まれて間もなく窒息死してしまったわ。 生まれて間もなく窒息死してしまったわ。 これは悪い知らせなのよ。双子が片方を 殺して生まれてくるっていうのは、とて もよくないことの前触れなの。旅人さん の故郷でもそんなものはなかったかし ら? 〈世界の終わりの村〉では占い師 方で 〈世界の終わりの村〉では占い師

だったわ。だけど、唯一違っていたの まるで聖書の一場面を見ているかのよう 首に釘を打たれて、丘の上に運ばれたわ。 たわ。その家族、妻と夫はまず、木製の の村の歴史で始めて、死刑を言い渡され が言ったのよ。そのせいでその家族はこ までわからなかったけれど。確かに誰か の。誰がそのことを言ったのかは、最後 れはいつしか村中に伝わってしまった 赤ん坊を家畜の餌にしたわ。だけど、そ その事実を必死に隠そうとして、死んだ に予想がついたわ。だから、その家族は わ。だから、よくない噂がたつのは簡単 らせだと。彼はよくあたる占い師だった を殺して生まれてきたら、それは悪い知 ける嫌な臭いがしたわ。 たわ。〈世界の終わりの村〉に人間の焼 する人はいなかった。二人は火刑になっ を吐き捨てていたわ。だけど、誰も同情 いたし、村人に対して憎悪と呪いの言葉 は、張りつけにされた二人は泣き叫んで 十字架に張りつけにされると、手首と足 あたしたちは群

> あたしたちに向けて発していたわ。あた れは二度と見たくない光景だったわ。火集に混じってそれを見ていたけれど、あ がその光景を克明に覚えていたでしょう 怨恨だったわ。きっとあの場にいた全員 された家族の場合、それは純粋な憎悪と な殺意しか残らなくなるの。火刑を宣告 ものであったかもしれない。だけど、い なぜかはわからないわ。初めは相対的な ない。だけど、絶対的悪は存在するのよ もわかるわよね? 絶対的正義は存在し れば悪になる。有名なお話を挙げなくて でしょう? そうよ、正義は見方を変え なたは正義は相対的であると考えている しはあれほど純粋な悪を知らないわ。あ ね。それほど強烈な場面だったのよ。 つしかその相対的な理由が失われ、純粋 に焼かれながら、その家族は純粋な悪を さて、その家族に関わる歴史はまだ続

〈世界の終わりの村〉の代表となったわるで生まれてきた赤ん坊はその二十数年後くわ。その家族の生き残り、片方を殺しくわ。その家族の生き残り、片方を殺し

素晴らしい人間だったわ。 素晴らしい人間だったわ。 素晴らしい人間だったわ。 素晴らしい人間だったわ。

はずだった子はたまたま、へその緒を首悪いことをしていないわ。彼の弟となるな何をしたのかしら。彼は何一つとしては何をしたのかしら。彼は何一つとしていないっても、一体彼知れない。因果応報といっても、一体彼知れない。因果応報といっても、一体彼い。もしかすれば、彼の両親がこの〈世

りも虐殺といった言葉が一番よく似合う 後の最後までわからなかったわ。それよ たして戦争と呼べるものかどうかは、最 だ、同盟者として、その村に加担するし の。この村の意志ではなかったわ。だか る国の王様の土地になることに反抗した よ。まあ、事実として何が起こったかと かったのよ、彼は。最初から最後まで これじゃあ、因果応報って言葉はおかし 何一つ悪いことをしてないはずなのに は彼ではなく彼の家族であったわ。彼は けじゃないわ。それに、それを隠したの めに死んでしまったのよ。彼が殺したわ が、急にひとつの王国に対抗できると思 百年あまりも誰とも争わずにしてきた村 わ。考えても見ればすぐにわかるのよ かなかった。戦争よ。だけど、あれが果 いうと、同盟を組んだ村がたまたま、あ いと思わない?そうね、本当に運が悪 に巻きつけて、生まれてきてしまったた 彼も知らなかったでしょうね。た それは同盟を組んでいたどの村も

ぐ近くで知り合いが、剣で斬りつけられあなたにはわからないかもしれない。す 追い討ちをかける兵士の姿を。見せしめ きの、自分の無力を。彼は前線が〈世界 ならまだいい。最後までじわじわと苦し た友人を見たときの気持ちを。殺される のためにひときわ残虐に殺されてしまっ るときの感覚を。死んでなお、無意味な 日に表情をなくして、言葉少なくなって 況を伝えていた足の速かった子供は日に て生きて帰ってこなかったわ。前線の状 わ。〈世界の終わりの村〉には他の村か そうなのよ。前線はすぐに北上してきた の終わりの村〉にたどり着く前夜に自殺 みを与えられ続ける姿を目の前にしたと いった。彼はきっと地獄を見てきたのね 〈世界の終わりの村〉からも若い男が何 ら逃げ込んできた女や子供が集まったわ 人か前線に送られたけれど、誰一人とし

くころには、それはただの虐殺になって前線が〈世界の終わりの村〉に辿りつ

することが出来なかったのかもしれな だったのかもしれないわ。だから、彼ら にあったら、殺されるという極限の状態 ないけれど、きっとそれは知らないもの の被害者であったのかもしれない。あた 沙汰としか思えないわ。彼らもまた戦争 たのかしら。今、考えるとあれは狂気の たわ。一体、何が彼らを突き動かしてい 中にいた女や子供を容赦なく殺していっ 死んでいくのを見たくなかったのよ。だ 戦を認めたわ。彼女らもこれ以上、人が かったけれど、彼女らは白旗を揚げ、敗 ていなかったからよ。武器なんて元々な もう村には小さな子供と女たちしか残っ 誰一人として、彼らに反抗しなかった さり銃殺されたのはまだいいほうよ。 い。だから、殺しまわったのかもしれな は彼女らが無抵抗でありながらも安心 したちは前線がどんなものだったか知ら けど、彼らは家のひとつひとつを回り、 い。彼らの殺し方は徹底的だった。あっ いたわ。〈世界の終わりの村〉の住民は

それを嫌がったわ。だけど、二日目とも 下に糞尿がたまるのよ。初めこそ彼女は けるの。大抵、拷問を受けるとき、彼女 喜んでいるのよ。ただ、目の前で笑い続 ら。彼らは彼女が排泄をする姿を見て 与えられるわ。どうしてだかわかるかし 事を与えるの。水なんて多すぎるぐらい 酷だわ。その間だけはしっかりとした食 姿勢で過ごしたわ。三日間よ。彼らは残 の。子供もよ。ある女の子は三日間その で、よ。その姿勢を一日中、やらされる ま先で立っていられるぎりぎりのところ のは、手首を後ろ手に縛って、滑車でそ さまざまだった。彼らが一番好きだった られたりもしたわ。彼らが考えた拷問は こまで支えたのか、あたしたちにはわか れに耐えたの。果たして、何が彼女をそ わ。ひどい光景だった。でも、彼女はそ なると彼女は何かを言う気力をなくした らは裸にさせられたわ。だから、すぐ真 のまま吊るしてしまうの。ちょうど、つ 女らに罪はないのに、ひどい拷問にかけ

らない。もしかすると、彼女はまだ若かったからかもしれない。この先の未来に一たからかもしれない。この先の未来に一たがらかもしれない。この先の未来に一にしがみついていたのかもしれない。では女は三日間の拷問でどうなろうが関係なかったのね。結局は、彼女は殺されてしまったわ。彼らにとって、彼女が三日間の拷問でどうなろうが関係なかったのね。結局は、彼女は殺される運かったのね。結局は、彼女は殺される運かったのよ。それならば、いっそのこと、拷問の初日で死んでしまったほうがと、拷問の初日で死んでしまったほうがと、拷問の初日で死んでしまったほうがいこ日間、拷問の耐えた意味はあったのかしら?

世にも男の子、女の子は娼婦の真似事 をやらされたわ。まるで慰安婦よ。彼らは子供たちに階級を与えたわ。まだ犯されたことのないものが一等。犯されて 二ヶ月までが二等。三等が四ヶ月まで 二ヶ月までが二等。三等が四ヶ月まで それ以外が四等よ。そして、四等はただ それ以外が四等よ。そして、四等はただ それ以外が四等よ。そして、四等はただ

史でしかないわ。あなたはさっき廊下に だったわ。後の五十年は天災と虐殺の歴 たわ。平和だったのは最初の五十年だけ 〈世界の終わりの村〉の歴史は幕を閉じ かったわ。そうやって、百年近く続いた に逃げ込んだのよ。幸い、彼らは〈世界 あたしたちはいち早く、〈世界の終わり〉 れた。もしかするとこの村は火というも も火刑で、村の最後の住民も火刑で殺さ みを浮かべ続けていたわ。初めての死刑 かかっている絵を見ていたでしょう。あ の終わりの村〉より先に来ることはな 人はあたしたちだけになってしまったわ。 くころには、もともとそこに住んでいた のに呪われているのかもしれないわね。 がこの丘に響き渡っている間、王様は笑 見物しに来たわ。最後まで断末魔の悲鳴 わ。その死刑には彼らの王様がわざわざ に残った女性は、全身を焼かれて死んだ れらは全部、初めの五十年に描かれたも 彼らが〈世界の終わりの村〉を出て行

> 満ちていたころの〈世界の終わりの村〉を、 た、旅人は〈世界の終わりの村〉に近づよ。旅人は〈世界の終わりの村〉に近づよ。旅人は〈世界の終わりの村〉に近づよ。旅人は〈世界の終わりの村〉に近づよ。旅人は〈世界の終わりの村〉に近づたるる国の王様に反抗したということで、ある国の王様に反抗したということで、ある国の王様に反抗したということで、ある国の王様に反抗したということで、ある国の王様に反抗したということで、ある国の王様に反抗したということで、 でい出すのよ。平和だったころの、活気にい出すのよ。 でいたころの〈世界の終わりの村〉に近づよ。 がなくなったわ。虐殺が行われたこと、 ある国の王様に反抗したということで、 この地はタブー扱いを受けたわ。この地 この地はタブー扱いを受けたわ。この地 この地はタブー扱いを受けたわ。ここに来 の間、流れ続けたわ。だから、ここに来

壁は風化が進んだわ。草はすべて枯れ、 壁は風化が進んだわ。草はすべて枯れ、 壁は風化が進んだわ。草はすべて枯れ、 壁は風化が進んだわ。草はすべて枯れ、 母と戻っていったわ。建物は傷み、外 くりと戻っていったわ。草切は低方のない ことだわ。〈世界の終わり〉は人間を失い、再び誰も住めないような土地にゆっ くりと戻っていったわ。草切は低み、外

大地は再び大きな亀裂を作った。色を失い、匂いを失い、住む人を失った〈世界の終わりの村〉は音すらも失ったわ。それが今から十年前の話よ。あれから、こは何ひとつ変わっていないわ。徐々にこは何ひとつ変わっているぐらいかしら。さて、これで〈世界の終わりの村〉の話さて、これで〈世界の終わりの村〉の話はおしまい。旅人さんはどう思ったかしら? この村の歴史を聴いて。

君たちはこの歴史をすべて見てきたのかな? それとも訊いた話なのかな? すべて、あたしたちが体験してきたことよ。〈世界の終わり〉に緑が宿ったことを、一緒に喜び、活気に満ちた〈世界の終わりの村〉で一緒に楽しみ、長い日の終わりの村〉で一緒に楽しみ、長い日の終わりの村〉で一緒に楽しみ、軍隊 照りと雨季が早く終わってくれと一緒に照りと雨季が早く終わってくれと一緒に照りと雨季が早く終わってくれと一緒に見い、初めての死刑を見て悲しみ、軍隊 がこの村の住民を虐殺していくところを がこの村の住民を虐殺していくところを がこの村の住民を虐殺していくところを がこの村の住民を虐殺していくところを がこの村の住民を追していくところ

なってしまって、どう思っているのか 君たちは〈世界の終わりの村〉がこう

な?

のよ。あれを見るたびにあたしたちは思

もう、どうも思っていないわ。言ったでしょう。今は忘却と消失の時代なの。 元々、〈世界の終わり〉の長い歴史から すれば、〈世界の終わりの村〉の繁栄な れてものはほんの一瞬でしかないわ。あ なたは一瞬の出来事をずっと覚えられて いるかしら?

にはなかったたくさんの感情を抱いた。 にはなかったたくさんの感情を抱いた そんなひと時をそんなにあっさりと忘れられてしまえるものなのかな? 現に君 たちの口から出たじゃないか。彼らと共 たきのいない、楽しみ、悲しみ、嘆いた、と 少なくとも、君たちはまだ、それらを忘れていない。

んでいたかったわ。あの五十年間は、あ 際を作り、彼女らの表情が見えなくなる。 際わくば、もう少しだけ、平和だった ころの、活気の満ちていたころの、〈世 ころの、活気の満ちていたころの、〈世

いひと時であったもの。

彼女たちは震えていた。となりに抱いている絵画をぎゅっと過去を振り返り、あのころを嘆くように握った。もうひとりの少女は強く握られ握った。もうひとりの少女は強く握られ

みになったほうがいいわ。今日はもう遅いわ。旅人さんも久しぶ

この家にはたくさんの部屋があった。 この家にはたくさんの部屋があった。 な女たちはまず、絵を私も部屋を出る。彼女たちはまず、絵を私も部屋を出る。 な女たちはまず、絵を私も部屋を出る。 ならに奥へと行く。 二人だけしか住んでいないにも関わらず、人だけしか住んでいないにも関わらず、

かなかった。あたしたちは彼らをいつでころ、旅人はあたしたちの家に泊まるしにまだあたしたちの家に泊するしにまだあたしたちしか住んでいなかったずっと昔の名残りよ。〈世界の終わり〉

この中でも一番上等な部屋よ。作ってもらったわ。でも、今では滅多に作ってもらったわ。でも、今では滅多に

だ。
るべき人間じゃない。どこでも寝てみせるべき人間じゃない。どこでも寝てみせいいいのかな。私はそんな丁重に招かれ

科がおどけて言い、彼女らはくすりと 笑う。二人とも左手を口元に添えている あたしたちにとって、旅人とはそれだけで丁重に招くべき人間なのよ。これは あたしたちのわがままだわ。ごめんなさ い、だけど、旅人さんにはあたしたちの わがままに付き合ってもらいたいの。

私は頷いた。彼女らは感謝の言葉を述れる。ちょうど、その時、私たちは一番奥の部屋についた。彼女が明かりをつ私を中に招き入れる。彼女が明かりをついる。ぼうっと炎に照らされて、部屋がける。ぼうっと炎に照らされて、部屋が明るくなる。

部屋の壁には三枚の絵が飾られていた。

活気に満ちたころの〈世界の終わりの村〉が描かれた絵画が二枚と、もう一枚はまが何もないが、緑がこの丘を覆っている絵画だった。印象からもそれが最も古い絵画だった。印象からもそれが最も古いに凝った装飾が施されたテーブルがあった。掃除が行き届いているようで、埃った電き、ベッドに腰掛ける。柔かく、そに置き、ベッドに腰掛ける。柔かく、そしてなによりとても温かかった。

たてのようだ。
とても掃除が行き届いているようだね。

に、すべての部屋をね。の。それにベッドも毎日敷きなおしているわ。いつでも旅人さんが来ていいようの。それにベッドも毎日敷きなおしているも

ろからずっと?のかい? 旅人がまったく来なかったこ 君たちはずっとそれをくり返している

彼女らが毎日、部屋を掃除しているのか彼女らは頷く。私はどういう思いで、

気になった。訊いてみようと思ったが、気になった。訊いてみようと思ったが、のベッドであった。私はすぐに横になってしまう。ふと、部屋が真っ暗になる。でしまう。ふと、部屋が真っ暗になるがなからが明かりを消したのだろう。

を描いた絵画を思い出した。 満ちていたころの〈世界の終わりの村〉でいた。私はまどろみの中、あの活気にていた。私はまどろみの中、あの活気に

日と変わらない鈍色の空。まるで昼夜のに置いた捩子巻き式の懐中時計を見る。に置いた捩子巻き式の懐中時計を見る。に置いた捩子巻き式の懐中時計を見る。たずの光はない。私はのっそりと起き上はずの光はない。私はのっそりと起き上がり、カーテンを開け、外を見渡すが、がり、カーテンを開け、外を見渡すが、がり、カーテンを開け、外を見渡すが、がり、カーテンを開け、外を見渡すが、がり、カーテンを開け、外を見渡すが、がり、カーテンを開け、外を見渡すが、

概念がないかのように、すべての時間に概念がないかのように、すべての時間に視線を空から〈世界の終わりの村〉に向ける。この部屋からは〈世界の終わりのける。この部屋からは〈世界の終わりの村まですっと緑が広がっている情景を想像してみようとしたが、出来なかった。この公費の終わりの村〉に緑が広がっている姿はあまりにも想像できないものだっる姿はあまりにも想像できないものだった。

てきた。
できた。
ながら、彼女らのどちらかが部屋に入っながら、彼女らのどちらかが部屋に入っながら、彼女らのどちらかが部屋に入っながら、彼女らでろうと

ど、よいかしら?
ど、よいかしら?

がでいるから。君も食べるかい? 別に構わないよ。食べものはたくさん

が、彼女は首を横に振った。私は再度、私は荷物の中から食料を取り出す。だ

上に並べた。私たちは向かい合うように分の分だけ食料を取り出し、テーブルの

して椅子に座る。

間違っていたら、ごめん。妹さんかな?

はしなかった。仕方がないので、私は自べながらも、決して食料を受け取ろうと彼女に確認した。彼女は感謝の言葉を述

私は頷き、彼女にあまり長く滞在できない旨を説明する。明日にはこの〈世界の終わりの村〉を出て行くであろう。だから、その間に見ておきたいものはすべから、その間に見ておきたいものはすべなく、〈世界の終わりの村〉にも足を運なく、〈世界の終わりの村〉にも足を運なく、〈世界の終わりの村〉にも足を運なく、〈世界の終わりの村〉にも足を運

なたが悔やむことはないわ。それが当たないわ。仕方ないことよ。このことであ

人は今まで、ほんの一握りの人間しかい

いいのよ。あたしたちを見分けられた

り前なのよ。

彼女は紅茶を飲む。私も紅茶で喉を潤

備をしているわ。

ごめん。やっぱり君たちは見分けがつ

見に行くの?

かないよ。

紅茶を一杯飲むと口を開いた。

あたしは姉よ。妹は今、仕事に行く準

紅茶を置き、彼女の返事を待つ。彼女は

ら、言った。彼女はくすりと笑う。私は

私は彼女の持ってきた紅茶を飲みなが

それなら、今、あたしたちと一緒に行れに今行けばいいものが見れるわよ。れに今行けばいいものが見れるわよ。

だわ。 きっと旅人さんも気に入ってくれるはず

な?
ていくよ。君たちが案内してくれるのかとても素敵なものがあるんだろう。ついとても素敵なものがあるんだろう。つい

彼女はそれを観察するようにじっと見て 彼女はそれを観察するようにじっと見て いた。荷物はここにおいていき、身軽な いた。荷物はここにおいていき、身軽な をはテーブルの上のカップを両手に持 ち、部屋を出る。私はその後をついて行 ち、部屋を出る。私はその後をついて行 ところで止まってしまった。必死に笑い ところで止すってしまった。必死に笑い ところで止するが、彼女は扉から三歩歩いた

(O) 4

終えると、涙目のまま私に向かって謝っ 私はきょとんとした目で彼女を見ること ろうか、笑い声をあげながら微笑んだ。 しか出来なかった。やがて、彼女が笑い すると、彼女は耐えられなかったのだ どうしたんだい?

笑ってしまったわ。 あんまりにも面白かったから、つい

とを言ったかな? 何が面白かったんだい? 私が変なこ

ないわ。騙してごめんなさい。でも、よ あたしがしたのよ。あたしは妹よ。姉じゃ くわかったわね。 いいえ。あなたは何にもしていないわ。

を理解出来た。 そう言われ、 私はやっと事の成り行き

思っているほど、複雑なことは考えてな じゃないかと思っただけだよ。君たちが 別に理由はないさ。ただなんとなく妹

旅人さん、あなたはこのことを軽く見

うせ二分の一の確率だろうって考えてい けられるものじゃないの。旅人さんはど ないの。あなたで三人目よ。すごく珍し 一の確率を当てた人は、まだ二人しかい るでしょう? でも、実際はその二分の ているけれど、実際はそんな簡単に見分

ることよ。 ええ、褒められることであるし、誇れ それは褒められるべきことなのかな?

彼女の表情は驚愕から愉快に変わり、 た何かを言う。彼女は頷くと、いよいよ はそれを訊くと、目を丸くし、彼女にま がいた。彼女は微笑みながら彼女に近づ で話していた少女とまったく同じ姿の姉 の端には隠しきれない笑みがあった。 き、耳元で愉快そうに何かを話す。彼女 めた彼女についていく。外では先ほどま 私はやや疑問を抱えながらも、歩き始

旅人さん、彼女が妹だってわかった

私は戸惑いながらも頷いてみせる。

をくり返した。 女は先ほど彼女が言ったことと同じこと

もしれないけれど、これは本当にすごい ことなのよ。 あなたにはそのすごさがわからない

とって何か特別な人間なのかな? れど、君たちの言葉を聞くと、これはと ても重要なことなんだね。私は君たちに 私にはそのすごさがよくわからないけ

もなれるの。 なたは与える側にもなれるし、奪う側に たちに幸せを与え、それを奪ったわ。あ の行動しだいよ。今までの二人はあたし ないかもしれない。それはきっとあなた そうね。そうかもしれないし、そうで

かもしれない。 で君たちは喜ぶかもしれないし、悲しむ るってことなのかな? 私の行動しだい それは私がどちらになる可能性もあ

け。そんなに硬くなる必要ないわ。それ いわ。ただ今までの二人がそうだっただ 確実に旅人さんがそうなるわけじゃな

界の終わり〉を目指す。 は歩き始めた。丘のさらに先にある〈世 ければいけないと思ったからだ。彼女ら るようなものはなかったものの、 女らに謝る。彼女らの顔からは私を責め な質問をしてしまったと思った。私は彼 謝らな

ないかもしれないし、奪いもしないかも すれば、あなたはあたしたちに何も与え を旅立つんでしょう? それならもしか にあなたは明日には〈世界の終わりの村〉

しれない。

君たちはそれでもよいと思っているの

ぐらい歩かなくちゃいけないけれど、旅 ろに〈世界の終わり〉があるわ。二十分 人さんは大丈夫かしら? ここから大体、二十分ほど歩いたとこ

在なんだ。君たちはそれをみすみす逃す 福を与えることが出来るかもしれない存 かな?もしかすれば、私は君たちに幸

たちよりも、ゆっくりになるかもしれな いけれどね。 大丈夫、歩くのには慣れているよ。君

る場所もあった。周囲を見渡しても何も 粒の細かい砂で、足が沈み込みそうにな 先は霧に覆われていて、 ない。砂漠がずっと広がっているだけだ。 私たちは歩き出す。海岸線にあるような たような光景である。灰色と白の砂漠を 白いペンキをめちゃくちゃに撒き散らし い砂の混ざる砂漠だった。まるで子供が 丘の先に広がるのは、ところどころ白 見渡すことが出

ちは生きていけるのかな? 無限とも続

くかもしれないんだ。

彼女らは答えない。私も少しいじわる

未来を思い続けるのかい?

それで君た

した〈世界の終わりの村〉で、まだ見ぬ

永遠に待ち続けるのかい? この退廃

ても、未来はまだ失われていないわ。

し続けるのよ。たとえ何もかもが失われ であたしたちはずっと一緒にここで暮ら 今回がだめでも、また次がある。それま もしれないわ。あたしたちは待ち続ける。

この感覚は旅人さんにはわからないか

来ない。この先に〈世界の終わり〉があ

姿よ。〈世界の終わりの村〉もいつかこ あなたも風化しかけている村を見たで の砂漠の一部になってしまうと思うわ この砂漠は〈世界の終わり〉の本当の

ろうかと思う。私は彼女らを見た。 もしない間に砂が靴のなかに入り込むこ ことが何度かあった。そのたび、私は靴 溢れてきた。砂漠は思ったよりも歩きに が砂を巻き上げ、私たちを通り過ぎてい らは裸足だった。 とがあった。彼女らは気にならないのだ の中に入った砂を取り出す。だが、数歩 くかった。いともたやすく膝まで埋まる く。寒いはずなのに、汗は止めどもなく 私は歩きながら頷く。時折、冷たい風

ちょっとでも離れればすぐ彼女らを見失 らを見失わないように必死に後を追う。 い霧があたりを包んだからだ。私は彼女 やがてあたりの視界が悪くなる。薄暗

まったであろう。それほど濃い霧であっ い、ここで迷い、最悪の場合は死んでし

りも、まず先に全身で感じられた。ぴり えてくる。その音は耳で感じるというよ えてきた。それと共に低い地鳴りも聞こ く大きなものである。 ぴりと空気を伝わってくる何かものすご 金属と金属のぶつかる音がかすかに聞こ 霧の中をだいぶ進んだ時、どこからか

そろそろ着くわ。旅人さん、大丈夫か 砂漠を歩くのは大変だったで

いるのかな?とても大変だろう。 君たちはいつもあんなところを歩いて

なんだい? こを歩いてはいけないのかもわかるわ。 よ。慣れてくれば歩き方も覚えるし、ど があるのかい? ところで、この地鳴りのような音は何 毎日、三回よ。もう慣れてしまったわ 〈世界の終わり〉には何か

それは見てからのお楽しみよ。ほら、

もうついたわ。

げる。 かごうんごうんという音が響いていた。 私は〈世界の終わり〉にあるそれを見上 霧が薄くなる。あたりにはいつの間に

ているのか、よくわからない。ときどき 鳴を上げる。どの歯車がどれにかみ合っ 地平線の彼方まで、巨大な機関が続いて のごとく、東の地平線の彼方から、西の とかみ合い、まわっている。まるで城壁 な歯車である。それが何百、何千、何万 それらは歯車だった。それもとても大き その全体像を掴もうとする。よく見ると だったからだ。私たちは霧のせいでそれ かった。それはあまりにも大きいもの 何かお遊びのように機械仕掛けのものが うたびにぎしぎしと音が伝わり、軸が悲 口からは蒸気が噴き出す。歯車がかみ合 いた。ピストンがせわしなく動き、排気 かったのだ。私は何歩か後ずさりをし、 にかなり近づいていることに気がつかな 初めはそれがなんなのか、わからな

想像していたのだ。 あるいはそれこそ見えない壁に阻まれて のが広がるか、この先は暗闇でしかない 像していた〈世界の終わり〉とはまった 属の大合唱が私の耳にようやく届く。想 何を動かしているのかもわからない。金 のようだった。誰が作ったかもわからな すると、この不恰好な何かの動力の中身 の部品をこれに取り込んだのかもしれな のは捨てられていたありとあらゆる機械 ていた。もしかすれば、これを作ったも うなもの、機械仕掛けの人形だったも ルだったもの、何かの車輪、羅針盤のよ 混ざっていた。時計だったもの、オルゴー い。だが、そういうものを除外して推測 な機関に飲み込まれるかのように、付い の。さまざまなものが、まるでこの巨大 いるような、何もない虚無の空間を私は く違っていた。もっと深い溝のようなも い、何のために作ったのかもわからない。

かの動力の中身のようだけど。 これは一体なんなのかい? まるで何

れはどこまで続いているんだい? これは誰が作ったんだい? それにこ

界〉は止まってしまうの。この先に続く だから、これが壊れてしまえば、この〈世

そうよ。これはこの〈世界〉の動力なの。

だわ。まるで大きな城壁のようだわ。 を作ったのかもわからない。これはどう 終わり〉なのよ。それに誰がこんなもの この先にはいけない。だから、〈世界の やら東にも西にもずっと続いているよう どちらもわからないわ。あたしたちは

のなのよ。ほら、あなたにも聴こえるで ない。〈世界の終わり〉とはこういうも

しょう。蒸気が噴きあがる音、金属同士

から、私たちはこの先に行くことは出来 のは歯車が複雑に絡み合った場所よ。だ

そのときは確か、百キロメートルに渡っ 北方からの野蛮人の侵略を防ぐためにね。 あったことがある。何百年という歳月を くんじゃないのかな? れも何週間か歩けば、終わりにたどり着 ら、終わりを見つけることが出来た。こ かかけて、その城壁に沿って歩き続けた 永遠と続くと思っていた。実際は一週間 て城壁であったと思う。それも東や西に かけ、その国の王がそれを作らせたんだ。 昔、訪れた国にもとても長い城壁が

だと思うの。それにここをずっと歩き続 たぶん、東西の終わりまで続いているん 無理よ。これは永遠に続いている

鼓動を聴きながら、複雑に絡み合う歯車 塊になるような雰囲気。私は〈世界〉の た。もしも、私たちがどこかの歯車を外

してしまえば、すべてが崩れ落ち、

鉄の

まれば〈世界〉はどうなってしまうのだ われる歯車の群れを見上げる。これが止

ろうかと思った。不恰好なそれらは危う

いところで、成り立っているように見え

もかもがこの〈世界〉の鼓動なのよ。 が削られる音、何かが破壊される音、 滑り、移動する音、金属が軋む音、何か がぶつかる音、歯車がかみ合う音、軸を

何

私は改めてこの永遠に続いていると思

下手すれば、腰まで埋まってしまうほど もの。この先に何があるかわからない。 より先は自信を持って足を踏み出せない けるのは無理だわ。あたしたちでもこれ の穴があるかもしれない。

を飾るかのようにその捩子巻きは収まっ らが胸に抱くように持つ。彼女らの胸元 から二つ出てきた。それを一つずつ彼女 見、変わった外見を持つそれは、鞄の中 つけることが出来る。捩子を巻くには一 あるが、棒には螺旋の溝がついている 中から、不思議なものを取り出した。一 にも純金の証であるかのような灰色を見 表面は光沢をなくしているが、錆びの中 灰色で大きさは一冊の本ほどであった。 見、捩子巻きをするためのもののようで 彼女らはそう言うと、持ってきた鞄の

それは一体、何なんだい?

の動力は毎日三回、捩子を巻いてやらな いといけないの。この捩子巻きが不思議 捩子を巻くためのものよ。この〈世界〉

彼女たちはその奇妙な捩子巻きを持って、〈世界の終わり〉に近づく。私も彼女らの後を追う。私はその先にある二つの穴を見つけた。捩子巻きを挿す場所なのだろう。彼女らはその二つの穴にゆっのだろう。彼女らはその二つの穴にゆっちとと繋に刻まれた溝を持つ捩子巻くりと螺旋状に刻まれた溝を持つ捩子巻くりと構と溝がかみ合ったことを確認するりと溝と溝がかみ合ったことを確認すると、二人は同時に捩子を巻く。〈世界〉と、二人は同時に捩子を巻く。〈世界〉と、二人は同時に捩子を巻く。〈世界〉と、二人は同時に掠子を巻く。〈世界〉と、二人は同時に掠子を巻いた。

和え、旅人さん、見て御覧なさい。最初はこんなに小さな歯車から始まっているのよ。それが長い年月を経て、この大きな歯車は親指の爪よりも小さなものだった。それがせわしくなく回転している。それらが組み合わさり、徐々に大きな歯車に動力を伝えていく。やがては私の背格好よりも大きな歯車を回し、それがさ格好よりも大きな歯車を回し、それがさらに一回りも二回りも大きな歯車を回していく。そうやって、〈世界の終わり〉は動いていた。

私はただその壮大さに圧倒されていた。
一体、どれぐらいの歳月をかければ、これらを回すに至る力を与えることが出来るのだろうか。彼女らは一体、いつからこれに生命を吹き込み続けたのだろうか?

が生まれる前、その母が生まれるもっとわり〉に捩子を巻き続けているのかな?わり〉に捩子を巻き続けているのかな?

あたしたちはそのとき、あなたのことを あたしたちが捩子を巻き続けるのは同じ 思って後悔なんてしない。あたしたちは たちも母のように朽ち果てるわ。だけど 望を捨てたりはしないわ。それでもあた はこの〈世界〉が動き続けるかぎり、希 の向こうにあったとしても、あたしたち 続けるわ。たとえ、まだ見ぬ未来が悠久 たしたちは待ち続けるわよ。そして、毎 は待ち続けるのかい?と言ったわ。あ くかもしれないこの時間の中で、君たち ことなのよ。いわば、これは祈りよ。旅 の前で毎日、手を合わせ祈る。それと にこんな風習はなかったかしら? 神様 みんなそうやってきたわ。あなたの故郷 続けているのよ。一日も欠かすことはな 前から。あたしたちは二人で捩子を回し 子にそれを託すわ。その子たちもきっと したちの時間は有限よ。いつか、あたし 日欠かさず、〈世界〉に生命を吹き込み 人さん、あなたはあたしたちに無限に続 いわ。あたしたちの母も、その前の母も

世界の果ての年代記《クロニクル》 -----World's End

も見たでしょう。あの白と灰色の混ざっ 待ち続けるでしょう。旅人さん、あなた た砂漠を。あの白色は昔あった建物の跡 しれない。それでもかい? それは君たちの世代では叶わないかも

なのよ。建物がすべて風化して、砂漠の

一部となったの。あんなにあるのよ。も

あたしたちの子供はあたしたちよ。そのよ。そこでは連続性が保たれている。いわば、永遠に死なないのよ。あたしという存在は失われることがなく、永遠に続いているから存在は失われることがなく、永遠に続いているわ。

い。
だけど、君たちは君たちの母を知らな

世界の終わり〉の歴史も。世界の終わり〉の歴史も。このでは、あたしたちは知っている。こ

でもそうだったかもしれない。今、あたでもそうだったかもしれない。歴史はくり返されるのよ。たとえ、今、あ史はくり返されるのよ。たとえ、今、あ中はくり返されるのよ。たとえ、今、あいに生命を吹き込み、緑一杯の土地にしてしまっても、またいつか誰かがこの土でもそうだったかもしれない。今、あたでもそうだったかもしれない。今、あたでもそうだったかもしれない。今、あたでもそうだったかもしれない。今、あたの終わりの料といい。

したちが踏みしめている大地の砂はすべ

そうじゃない。私が言っているのは君としよう。だけどそれは母を知っているとしよう。だけどそれは母を知っているとしよう。だけどそれは母を知っているととは全然違う。

るのかしら。繁栄と滅亡を繰り返し、そ

千年の歴史をあたしたちは踏みしめてい

れでも再び繁栄する。それが永遠と続く

〉、あたしたちもいなくなることは〈世界の終わりの村〉はなくなら

ない。一体、何年、何十年、何百年、何て〈世界の終わりの村〉だったかもしれ

終わりの村〉に引き返す。彼女らの後をきを鞄の中にしまい、彼女らは〈世界の彼女らはそれに答えなかった。捩子巻

女らは私に一言だけこう言った。女らは道中、ほとんど黙っていた。私も女らは道中、ほとんど黙っていた。私も

ところだったでしょう? 旅人さん、〈世界の終わり〉は素敵な

私は頷く。彼女らはいつものように小悪魔のような笑みを浮かべた。それ以上悪魔のような笑みを浮かべた。それ以上漢を歩き続けた。この砂漠が昔の建物のなれの果てだと思うと、とても歩きにくかった。この下で数多の人間が生き、死かった。この下で数多の人間が生き、死かった。この下で数多の人間が生き、死の歴史もある。繁栄の歴史があり、直殺の歴史もある。りとあらゆる歴史がるのでした。